

序 言

森 理恵

本書は、文部科学省の委託による服飾文化共同研究拠点文化ファッション研究機構における、2009年度～2011年度の共同研究「20世紀における「きもの」文化の近代化と国際化—物質文化・表象文化の視点から—」の最終報告書である。本書の構成は第Ⅰ部と第Ⅱ部からなる。第Ⅰ部には、文化ファッション共同研究機構に提出した各年度の報告を再録し、共同研究の概要、および調査や研究発表の詳細がわかるようにした。第Ⅱ部には、メンバーそれぞれの論文を掲載し、研究の広がりや深まりを理解してもらえようようにした。

本研究の目的は、「きもの」の「モノ」としての物質文化的側面と、テキストやイメージとしての表象文化的側面の双方に着目することにより、20世紀に「きもの」がいかにして近代化・国際化を達成したのかを、総合的に明らかにすることである。

共同研究のメンバーは、米国ニューヨーク市在住のインディペンデント・スカラー テリ・五月・ミルハプト、米国ボストン大学現代言語比較文学部准教授 セーラ・フレデリック、立命館大学衣笠総合研究機構教授 鈴木桂子、日本女子大学家政学部被服学科准教授 森理恵（研究統括者）の4人である。

本研究では、カギカッコをつけてひらがな表記とした「きもの」を、現在、成人式や国際会議、茶会などで見られるような主に女性用の和服の呼称として用いている。くわしく説明するならば、長袖の長着物に幅の広い帯を組み合わせ、帯揚げや帯締めを使いおはしりをして着付けた服装のことである。このような形態や着装が一般化したのは近代であり、都市部からしだいに地方へと広まっていったものである。その一般化の過程で、形態や着装、その意味合いもさまざまに変化していった。このような服装を現在「きもの」と呼ぶようになった経緯は、本書所収の森論文「「きもの」の近代化と植民地主義 ～物質と表象、衣服と言葉～」をご参照いただきたい。

さて、そのような「きもの」研究としてのこの研究の特色は次の三点である。

第一は、いわゆる「きもの」を、従来のように伝統的なもの、日本的なもの、あるいは完成されたもの、固定的なものとしてとらえるのではなく、現代社会・国際社会のなかの生きた服飾として、その流動的な姿をとらえようとする点である。

第二は、「きもの」の形態や着装だけでなく、「意味」に着目する点である。他のあらゆる衣服と同様に、「きもの」は、着装した個人の立場や思想を表現するほかに、特定の社会集団のもつ、儀礼性、民族性、芸術性、などさまざまな意味を担って社会の中に存在している。「きもの」の意味は、家族のなかで着装されるとき、職場で着装されるとき、国際会議で着装されるときでそれぞれ異なる。さらに、人間が着装したときだけでなく、美術館に展示されたとき、土産物として店

頭に並んだとき、雑誌のグラビアを飾るときなど、さまざまな場面における「きもの」の意味も考える必要があるだろう。

第三は、「きもの」の物質的側面と表象的側面の両者を同時にとらえようとする点である。材質と技法と用途をもった「モノ」としての「きもの」をしっかりと見据えながら、同時期の文学や映画に表現された、表象としての「きもの」をも調べることにより、時代のなかの「きもの」により迫ることができるのではないかと考えた。

このように、第一の特色、「きもの」を常に変化する流動的なものにとらえる視点、第二の特色、「きもの」の意味に着目する視点、そして第三の特色として、「きもの」の物質性と表象性を同時にとらえようとする、この三つが本研究の特色である。

また、共同研究者である私たち 4 名は、美術史、近代文学、文化人類学、服飾文化史、と、それぞれ異なる学問的訓練を受けており、出身地域も米国 2 人、日本 2 人から成る。異なる学問領域と異なる地域から、横断的に「きもの」を研究していることも、本研究の特徴であるといえよう。

私たちはこの 3 年間、国内外の近代「きもの」のコレクションを調査すると同時に、美術館展示、市場流通、文学や映画における「きもの」にも目を配り、調査を進めてきた。調査内容については本書 10～14 ページに概要を掲載した。

研究成果の公開としては、2011 年 5 月にカナダのアルバータ大学物質文化研究所で開かれたシンポジウム“2011 Conference - Material Culture, Craft & Community: Negotiating Objects Across Time & Place”において研究結果の一部を報告し、2012 年 2 月には東京の文化学園大学において文化ファッション研究機構主催のシンポジウム「20 世紀における「きもの」の国際化—日本化と脱日本化—」を開催した。東京でのシンポジウムでは、実践女子大学他非常勤講師 池川玲子氏と京都造形芸術大学准教授 成実弘至氏をディスカッサントにお招きし、下記のような順序で報告をおこなった。約 60 名の参加を得て、報告後の質疑応答、ディスカッションも大いに盛り上がった。

セッション A 「きもの」とローカリズム・グローバリズム

報告 1 テリ・五月・ミルハプト

“Kimono” 今昔：国内と国外の観点とその変遷

報告 2 鈴木桂子

「キモノ」文化が海外を廻る：輸出品、アロハ、スカジャンの一考察

セッション B 「きもの」とコスモポリタニズム・コロニアリズム

報告 3 セーラ・フレデリック

「キモノ」のコスモポリタニズム：女性雑誌小説を中心に

報告 4 森理恵

「きもの」の近代化と植民地主義

3 年間にわたる、国内外の美術館博物館、図書館、個人収集先での調査と、共同研究員相互のディスカッション、外部研究者との意見交換により、私たちが明らかにしたのは次のことである。

(1) 20 世紀の西洋やアジアにおける生産・流通・消費をとおして、物質としての「きもの」は、

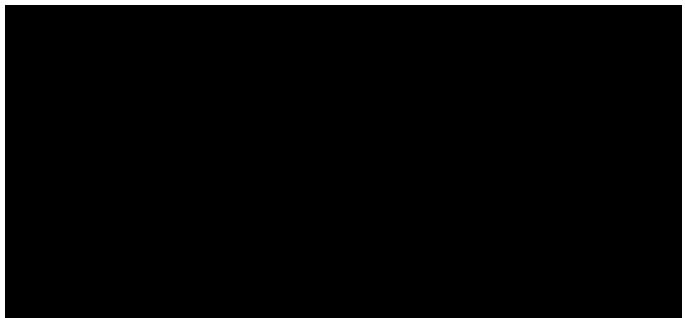
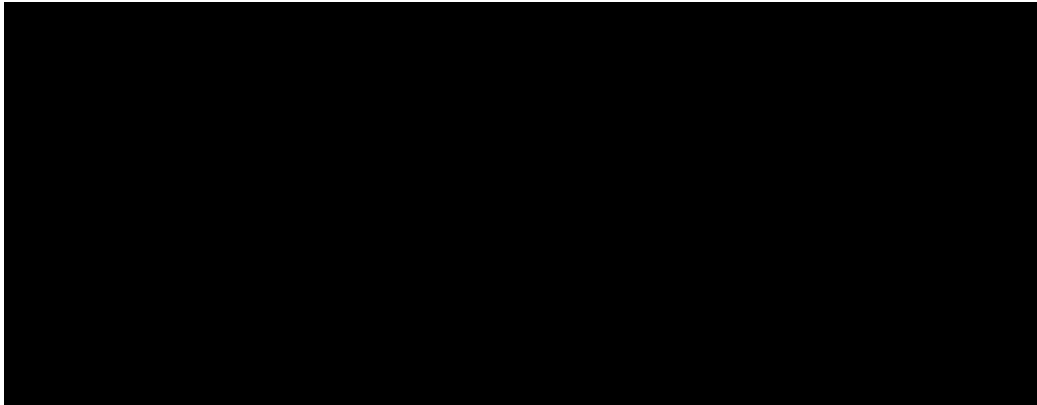
形態、技法、意匠のそれぞれの面において、多様性を獲得した。たとえば、裾にかけて広がるように襷を入れるといった形態の工夫、西洋風刺繍のような技法の開発、そして、受容される地域に合わせた色と模様のカンセツである。アロハやスカジャンといった衣文化も「きもの」の受容の一局面である。

- (2) さらに、このように多様に展開した「きもの」は、着る物としてだけでなく、美術品として美術館に展示されるようになり、映画や雑誌などのメディア上に表現され、イメージとしても流通した。20世紀における「きもの」文化は、従来考えられていたより、はるかに多様な物質性と表象性を持っていたことを確認できた。
- (3) また本研究では、「きもの」をオリエンタリズムだけでなく、コスモポリタニズムやコロニアリズムの文脈からとらえようと試みた。大正期の国内では、西洋対東洋の枠組みではないコスモポリタニズム的な「きもの」が実践されていたし、植民地では植民者の規範的な文化のひとつとして「きもの」が利用されていた。「きもの」のもつ意味は、戦間期、15年戦争期、占領期といった時代の変化につれて変化してきたし、日本かアジアか欧米かといった地域によっても、そして、「きもの」を着たり見たりする、各個人の階層やジェンダーによっても、変化しつづけてきたのである。
- (4) 物質文化としての「きもの」は、近年とくに、アジアで生産され、国内のみならずアジアや欧米で消費されるといった、脱日本化の傾向が強まっている。ところが、それと反比例するかのよう、「きもの」が長く続く「日本の伝統」であるとする誤った考え方もまた、強まってきている。「きもの」が、近代史のなかで大きな変貌をとげたという事実、そして現在、グローバルに生産・流通・消費されているという事実は無視されているのである。

物質としての「きもの」が日本の内外で変容し、脱日本化すると反比例するかのよう、あるいはコインの裏表のように、オリエンタリズムの構造のなかで表象としての「きもの」は、ますます日本化し、「日本」の表象、「日本女性」の表象としての役割を強化している。私たちは、オリエンタリズムの構造をこれ以上、再生産したり強化したりしないために、「きもの」の物質・表象両面でのありかたを今後も監視していく必要がある。これが現段階でのこの共同研究の結論である。



“Material Culture, Craft & Community: Negotiating Objects Across Time & Place” ポスター



シンポジウム「20 世紀における「きもの」の国際化—日本化と脱日本化—」会場風景
2012 年 2 月 18 日 撮影：長尾順子